

文学的に読む 悪という存在

対談

島田 雅彦
(作家)

野崎 欽
(フランス文学者)

小説や映画では作品ごとに、現実世界では
政治の局面ごとに悪という存在が登場する。

それはなぜか？すべての物語が悪を求めているせいいか？
読み、観、そして生きる我々が悪を求めているせいいか？
「文学性」をキーワードに二人の泰斗が悪について語り尽くす。



写真① トッド・フィリップス監督の映画『ジョーカー』(2019年)は悪の誕生の物語をホアキン・フェニックスが演じた。
©Capital Pictures/amanaimages

とえばネットフリックスやアマゾン・プライム

のようないンターネット・メディアで有料配信されているものも含めて、最近の映像作品は特にシナリオの文学的レベルが高くなってきたからです。おそらく、これは世界的な傾向だろうけど、特に米国では紙媒体の文学で食つていくのは難しくなってきているので、多くの文学的才能が映像の分野に流入しているんだと思います。だから「文学における悪」というテーマで映画から話を始めるのは、むしろ時代にマッチしているし、そもそも今回の特集も『kotoba』の編集会議で『ジョーカー』を観た編集者たちが盛り上がりがつて実現したそだから(笑)。

ジヨーカーというものは、クリストファー・ノーラン監督の映画『バットマン』シリーズに出てくる悪役ですか？

野崎 そう。やはり、そういった背景があるて、『ジョーカー』は残酷演劇、そして三島由紀夫

『三世』でしょう。

野崎 作品のなかでリチャード三世は身体的ハンディキャップを持ち、それをバネにして狡猾さと残忍さを武器に権力への執念を燃やす人物として描かれていますね。

島田 そう。やはり、そういった背景があるて、悪は生まれるべくして生まれたというか、復讐の権利を認めて物語のなかで悪に必然性を持たせるのが「文学における悪」の存在意義なんでしょうね。

ク・ストーリーというか、悪の誕生の過程が掘

り下げられている。こちらはぐっと文学的な描き方というか、実存主義的で、ぼくが感銘を受けたポイントなんです。

ジョーカーは母親と二人で、質素かつ平凡に暮らしているんだけど、そこで彼はしばしば痙攣的な笑いを発するんです。これが延々と続くと不気味だし、不快でもある。しかし、この笑いが作品全体を通して非常に効いている。ジョーカーの“痙攣”が、観客をいわば金縛り状態にして悪が善から分離していく、その根源への部分へと力強く引きずり込んでいくんです。

島田 その笑いというのは、悪が復讐を果たして、つまり自己実現を完遂して、最後に上げる高笑いにも通じていくんでしょうね。

野崎 三島由紀夫さんの高笑いというのは伝説になっていますよね。ジョーカーの笑いは「ダークナイト・トリロジー」では、ある意味、三島さんのやつたと思います。

島田 三島さんには会つたことがないので伝聞にすぎませんが、あの高笑いもやはり、ボディ

ビルにのめり込まずにはいられなかつた彼の身体的なものであつたり、そういうコングレツクスの裏返しだつたんでしょうね。

野崎 その笑いが『ジョーカー』では超人的な